

が出てきた。「俺だあ、シベリアから今帰ってきたよ」
「お婆さん、おじさんが帰ってきたよ」、奥へ向かって大きな声で叫んだ。バタバタと足音と同時に「おー、おー」声にならない声を出しなから、お袋が走り出して来た。そのお袋も八十五歳で他界した。見なれぬ女の人は、兄嫁だった。家の中の床の間を見ると、自分の写真が飾られ、ご飯と灯明がともされてあった。

あれが夢であればいいが、そんな生やさしいものではない。思い出すと胸がつまる。戦争は悲惨で恐ろしいの一語に尽きる。

異国の地シベリアで栄養失調や強制労働で死亡した、戦友の冥福を心から祈る。

入ソ当時の思い出

栃木県 菅 房 雄

八月二十三日集合命令。いよいよソ連兵が来て武装解除。彼ら来る早々長靴をぬがせドタ靴と交換。酒をラッ

パ飲み。昼近く馬車に食糧積載出発、流浪の始まり。その夜から雨。満州の道路は日本の水田を歩くと思えば間違いない。不眠不休悪路の行軍、弱い馬は落伍してゆく。隊列を離れたら最後ハイエナのごとくついて来る現地民に掠奪暴行は必至。降る雨、泥んこの中帝国軍人のなれの果てが行く。翌日の夜阿城着。馬の手綱を両腕に抱いていつの間にか眠ってしまう。フト目を開けると、手綱が腕から離れている。馬もコクリコクリとやっているの、逃げられる心配はない。

次の日は雨が上がった阿城の街中、みな晴天白日旗に赤旗、打倒東洋魂の張り紙。歴史的にも支配者が移り変わっていたとはいえ、その変わりの身の早いのに驚く。貨車に乗せられ牡丹江方面に向け出発、途中幾度かとまる。ソ連軍貨車に乗ってきたが、そのときはまだ将校は軍刀所持していたので大過なし。何事か起きては大変と、若い見習士官をなだめるのが一仕事であった。その中トンネルの真ん中でとまる。なかなか動く気配なし。いよいよ爆破だと車外に出たが、真っ暗。馬やら人の死骸いっぱい。どうせやられるなり車の中がましだと。そ

のうちにやっと動き出す。横道河子でおろされる。満鉄の車両ここで終わり。ソ連側は片一方のレールだけはずし、広軌にしている。いよいよ野宿となったら雨、またそれもかなり強く降る。次の日徒歩、線路つたいに途中鉄橋の上で邦人の女の子拾い、交互に肩車にして歩く。山の上から水筒いっぱい肩にさげた兵が来る。終戦を知らないようだ。おまえたちはどこに行く、我々は日本に帰るんだぞと、あほらしい。平地に出ると薄暗くなってきたので、野宿。持ってきた米を炊き食べる。「おいしい」

夜をあけて洗面に行きびっくり、川のふちに馬、人の死骸。これで昨夕の飯おいしかったのか。この辺まで来ると民間人の数がふえてきた。白髪のお婆、一瞬胸が締めつけられる。政府軍部に見放された棄民の哀れな姿よ。海林の入り口で軍人と民間人分けられ、我々は兵器廠弾薬庫。収容所入り口周辺かなりの地方人がいる。いよいよ本格的な食生活だ。刃物は全然なし。草を手でむしり寝わら（ふとん代用）、燃料は電柱、それを犬釘一本で倒し割る。一日の仕事がそれだけだから、湿地に穴を

掘り水。満州独特ひどい水を、それも他の連中にとられるので、絶えず交代で見張り。シラムの大量発生、赤痢の発生。哀れなのは第五軍、夏服の上に戦闘部隊なので、ソ連の使役。我ら第四軍冬服、使役は一回飛行場まで黄色葉（五十キログラム爆薬）運搬（掩蔽ごう爆破）。川での沐浴一回。一山裏の拉古では朝夕ラッパの音、起床、消灯ときには突撃ラッパまで。夜は周辺の山でドンパチ、赤や青の曳光弾。ここに飛んでこなきゃ気は棄だ。

九月も半ば過ぎたころか、千人単位で出発と海林編成第一号一〇八大隊。我々の間で帰国ころまでなぞの一〇八大隊と呼んでいたがどこに行ったのか出ていった。十月にはいると我々も大隊編成一三五大隊、石山大尉（二中隊長）他の将校たちは海林着と同時に見えなくなつた。

十月十日海林収容所より牡丹江へ、途中拉古収容所（民間人）で弥栄の佐藤食堂にいたご婦人に会い一言二言。牡丹江通信隊旧兵舎跡、日中燃料集め、病院跡で懐かしい字を見る。第六次肥後村と壁に大書してある。鶴立巢の連中だ。が、すでに牡丹江民間人見ず。

十月二十四日出発、途中小休止、何げなく缶詰の空き缶と違って蹴飛ばしたら、ズシリ重いパイ缶（大）何とも言いようなし。貨車に乗るソ連兵の監視兵がマンドリン銃を持って立っている。かなり大きな駅（牡丹江）で貨車が何本もはいつている。そして我々同様食同然の兵の姿。ここで驚いたことを見る。逃亡者が出る。千人単位。一人でも欠員が出ればカンボーイ（ソ連監視兵）の責任、他の部隊に員数つけにくる。彼らは自分たちの責任さえ果たせばよい。マンドリンで撃ち合ひまでやる。我々はこれからカンボーイに守られ、変な話だが、自分の責任下にある兵だとわかると待遇がよい。彼らに任せて飯ごう炊飯、手当たり次第燃えるものを持ってきて燃やす。アワが少量、何べんでも水を入れ、また入れ、水を入れれば入れるほどにふえる、くだけ米くらいになる。口に入れば水っぽい胃の腑を満たすにはこれより他にすべなし。

汽車の旅

いつ発車したのかわからない。目覚めてみたらシベリア鉄道東進している。我が軍の戦車がかくざしている。

ソ連の戦車に比べるとなんと貧弱なことよ。大きな戦車に歩兵が乗りスカートの兵もいる。「ヘイヤーボンスキー」とどなり、親指を立てる。全く頭にくる。我々は実戦に参加していないから負けた気がしない。輜重が通る。四輪馬車に追い手綱、日本の輜重に比べれば機動性がある。真紅な太陽が沈み始める。いよいよ綏芬河、帝政ロシア時代の建物、立派な駅舎だ。満州最後の街。時に昭和二十年十月二十五日。国境線百メートル幅くらいを刈り払ってあるだけ。パイ缶をあげ皆で食べる。牡丹江の編成替えて小隊長は工兵曹長、班長も工兵隊下士官候補の兵長だが、梅林、牡丹江と一緒にだったので、お互いの故郷の話やらふるさとの味自慢。夜になり大きな駅に着く。さあこここそが運命の分岐点。ソ連兵いわく朝鮮軍（朝鮮駐屯）によってウラジオストクに至る線路は破壊されている。これを修理しながら日本に帰るのだと。だれもがそれを信じていた。これこそが逃亡防止の最良の策であったわけだ。真つ暗の中を汽車はヒタ走り而走る。その中に曹長の悲痛な声。てのひらには隠し持ってきた磁石がある。当列車は北進中と。万事休す。

途中何回かとまる。これが大変だ。車中にある石油缶簡易便所では用足しができない(悪臭充満)、小の方は扉をあけて二人で後ろからつかんでいてもらいますませる。風が強いと生温かいのが自分に返ってくる時もあるが、大はそうはいかない。一斉に下車して始めるが、いつ出発するともわからない列車、始末が悪い。小生海林でアメーバ赤痢。チョイチョイ腹痛便意をもよおすが、処置なし。

二日目の朝か、窓からのぞいていた兵が「おい海だ」我も我もとのぞいてみたら、どうも様子がおかしい。鉄橋らしきものも見える。「おい、ここはハバロフスクじゃないか」黒龍江、松花江、ウスリー江の合流点、河幅が広いはずだ。失意の中に列車は西北にイズベスト、いつの間にか進路が変わったと思っっているうちにコレドール、なかに知ったかぶりか、本当に知っているのか。シベリア唯一の温泉があり、シベリア出兵当時、ここいらまで日本軍が来たとのこと。ソ連人の女子供がいる。日の丸の旗ネッカチーフがわり。かつてハルビンで白系ロシアの女性を見ているので、大した珍しくはないが、チ

ビツ子に万歳(降服の意)されたときは頭にきた。しばらく歩くと収容所に着いた。日本兵これがかの一〇八大隊と。口きく間もなく(ダバイダバイ)で追い立てられる。アンペラを巻いて担いでいる者。ドラム缶の半切かごかきよろしく担ぐ者。各人の腰には缶詰の空き缶、針金で把手をつけたのをブラブラ。道路端を流れる水、満州の水と違い実にきれいだ。それをチョイチョイ飲む。水が十分に飲めるだけましか。行軍。ただ夢遊病のごとく歩く、歩く。暗くなり大きな建物に入る。土間コンクリート、アンペラを敷き、横になる。寒さは寒いが疲れがあるので眠る。朝起きて炊飯、コウリヤンの原殻ちよっとくらいじゃ煮えたものじゃない。炊き上がらない飯ごう担いで出発、編上靴が水道にすべる。千人が一列縦隊。ヨモギの葉(たばこ代用品)なぞ一枚もない。例によって腹痛便意もよおす。意を決して排せつ、病状特有、なかなか意のままにならず。カンボーイがマンドリンを抱え立っている。終わって服装止し終わったら「手を上げる」、身体検査、めぼしい物は何もなし。お守り袋を見つめる。「これなんだ」と言うから胸で十字きつ

て見せる。わかったのか返してくれる。このため小休止なし。昼、飯ごうおろしてまた炊く。一時間では食するに至らず、またぞろ担いで出発、薄暗くなって収容所に着く。空家、それにしても随分多い。かつて革命の折囚人を大量に送り込んだ跡だろう。やっとコウリャン飯にありつく。十一月の幾日かわからない、ただあるのは望郷の念。

テルマにて

十一月六日、凍結した河を渡り丘陵地にだんだん建てられた道路沿いの建物に入る。

あけて七日革命記念日とか、作業なし。作業といっても燃料の木板やら丸太一本も担ぐと、板一枚くらいの高さでもつまづく。やっと防寒被服になる。編上靴ではたまったものではない。凍傷予防に絶えず足踏み、極度に衰えた体力ではどうにもならん。ソ連領に入って初めて井戸らしきものを見る。ソ連人もここから水を汲んでいく。井戸らしきものはあとにも先にもここだけ。このころから黒パン支給される。上等兵殿分配。あぐらかいた股の間に入るが多い。我々初年兵最低。使役は初年兵。

捕虜になっても何々古兵殿。それがしは何々をします。あきれて話にならん。「おい、おまえたち何年いても初年兵はこない。好いかげにしろ」と。我々は詩の文句じゃないが、お腹と背中がひつつくぞ。将校室の前を通るといい匂いがしてツイ足がとまる。当番兵マルマルふとっている。軍隊地獄の縮図か。ちようどこのころだ、何かが騒々しい。黒シャツの兵（挺身切込み隊各部隊より選り抜いて編成）が黒パン輸送のトラックから四キロパン（ロシアパン大きめの枕くらいある）、ラグビーよろしく兵からの兵の手、捕えようもない。ほんのわずかな時間に目的を果たし消えてしまった。よくカンポイに発砲されなかつた。

ある夜の点呼のとき、屋外マイナス四十度くらいはある。右へならえで右を見たら、防寒外套の左袖の上に何かがある。ひとみをこらせばシラミ、たまげたものだ。翌朝隣に寝ている丁上等兵呼べど答えず眠っている。よく見れば永遠の眠りについたものだ。彼がシラミの持主。シラミも身体に食いついていればまだ大丈夫と変な安心のしかたをする。そのシラミも日中屋外作業のとき

は実に静かな存在だが、夜ともなり暖房がきいてくる
と、なかなか大変な代物、不寝番に立ったときが彼ら
との闘い。赤く焼けたベチカの上で襦袢袴下を勢いよく
振ると、さながらゴマをいるごとし。時のたつのが早い
こと交代の時間。戦友の亡きがら埋葬しようにも凍土は
穴堀るのを許さない。空家には冷凍マグロよろしく兵士
のしかばね累々と山になっている。哀れ諸行無常。

モシカ（地名、『ブヨ、またはブト』のごとき虫より
もっと小さい。群生地なのでこの地名）

十二月にはいつてからか移動。俗称盗人米貨（燃費が
高くつくので）ソ連使用のトラックはほとんどこれだ。
乗車その日のうちに着く。幾度となく見てきた本格的収
容所八〇一分所（四地区八〇一）千人単位が六百人に減
る。死亡、入院「土方殺すにゃ刃物はいらぬ」歌があっ
たが「兵隊殺すにゃ原爆も大砲も弾丸もいらぬ一飯を
食わせなけりゃ、栄養失調でどんどん死んでいく。ここ
に来てまたしかり、ノルマによる給食、携行してきた
岩塩（乾パンの袋に入れ各自持っていたが、間もなく逃
亡につながるのと理由で没収される）飯ごうにお湯沸か

し岩塩汁、ただの水より腹の足しになる。蒼白い浮腫の
きた身体、足にできないのがいっぱい化膿して袴下にゆ
着、動かたびにピリピリと痛い。医務室に行けば軍医い
わく「何も葉なし、ソ連兵に見つからんうちに早く行
け」。

人所当時は雑用、病院（これから使用）清掃、薪割り、
水汲み、ソ連兵の炊事場何をやっているのかとのぞいた
ら、油の中にコンビーフ、グリーンピース。そこにゆでた
米をブツ込む。出来上がり。「ハラシヨラポータ」（よく
働いた）との飯ごうふたに一杯、おいしい。作業引率の
ソ連の将校、仁丹の広告のようなひげはやしたやつ、歌
を歌えと。三国干渉に悲憤慷慨。幼年学校の生徒作詩
「血汐と替えし遼東に……露助を切りて生贄……」

歌ってやるとソ連兵わかるらしくニコニコしてる。悪
口言われているのにと話し合ったが、彼らが我々を殺す
と言ったってわからんのだから天下泰平。明日も水汲み
やってソ連兵のチャー飯……そうは問屋が卸さない。

翌日はモシカに来て最初の犠牲者（初年兵山形出身）
が出る。五、六人で墓堀りに行く。が、何せ凍土、ツル

ハシはなくバール、スコップ（携帯用）、帰りに枯れ木を積んで火をつける。翌日解けた土を出す。何せ穴掘り人足、片足穴に突っ込んでいるやつ等、幾日かかったか。そのうちに職業調べをそれぞれに書いて出す。特務機関、警察、坊主（坊主ただもうけ人民の敵である）等々はごまかせと。いよいよ本格的になる。海林での大隊編成がおかしいと思つたからそのとおり。工兵隊伐採、輜重隊搬出、船舶工兵製材所（三交代）我々は搬出。盗まれてきた馬もかわいそう。六〇六（馬のNo）号と意気統合してノルマの達成できないこと。午前一回午後一回、馬も二回目になると絶対動かない。ある日曜日、馬の手入れに行く。柴木を束ねて馬の身体をこする。同病相哀れむでやっている、ソ連兵が「おまえは丁寧に馬体の手入れをしている。明日から厩舎にこい」。小隊ではニハラショールポータ（働き足りない、小隊のノルマが上がる）なので、一も二もなく承知。どこでどうなるかわからない。

夜間作業といっても朝夕馬全頭の体温計り。体温計五、六本持ち厩舎当番に手伝わせる。これは真面目に

やった。ここにドイツ兵が一人いた。かわいそうなくらいオタオタして、ソ連兵を見ると恐ろしがっている。我々から見れば不思議だが、実際に戦闘を交えた連中、わかるような気もする。その彼も間もなく姿が見えなくなる。

小生もラーゲルにいたときは、每晚十二、三回小用に起きていたが、それにも解放されやつと幾分体調が整ってきたころ、同年兵二、三人入院する。何かと思つたら盗んできたバレイショの過食による下痢。体力が極度に落ち込んでいるときの下痢は、命取りだ。その後どうなったか不明。私の場合はあまりの空腹に耐えかねて、馬鈴薯盗み。まんまと忍び込みポケット満杯になった途端、スカートの兵隊にホルドアップ。ただ一つ持ってきた馬鈴薯の美味であつたこと。彼女は救世主。

職業別申請の後またまた床屋は（理髪業）いないか。少しでもカミソリ使える連中、床屋なら楽だと「挙手」、ここにもあそこにも。間もなく驚くことが起きた。「全員入浴」昨年の八月以来入浴なし、髪は延び放題、ひげ、爪はどう処置したのかいまだに思い出せない。指の爪は

かんで処置した記憶がある。当日全員入浴。浴場そのものを温め「おけ」はなし。木の箱の湯一杯それで洗う。被服を消毒すること。皮類はだめと。サアそれからが大変。床屋どのひげ剃り。脇の下、いや全くたまげた。たまげた。たまげたついでにあと一つ、「シラミ全滅」。競って流言飛語が飛んだ、日本の男を「去勢」すると。いよいよそのときがきたか。私自身深刻に考えた。しかし、杞憂に過ぎなかった。今でもそんなことが昨日のように悪夢のように思い出される。

私の俘虜記

福岡県 藤吉 静男

昭和二十年二月、黒河第七国境守備隊八四部隊より歩二七四連隊に改編。四月、三中隊のみ隣部隊法別拉十三国守五六部隊南進後の警備につく。

黒龍江岸山上の臨江山監視哨近くのトーチカの重機関銃座より対岸のソ連領を眺め、満州の一番北の端に北か

ら、これ以上北に行くことはあるまいと思ったのに。

七月、独混二三五旅団。独歩七九八大隊三中隊に改編。八月八日、日ソ開戦、九日嫩江集結のため、法別拉転進。二十一日、嫩江着。二十二日、ソ連軍侵攻、武装解除され、作業第三大隊千五十人に編成される。

東京ダモイと言いながら、冬服防寒装具一式携行をソ連軍より命ぜられ、九月十三日、嫩江出発。二十六日、黒河より入ソ。ウラジオから日本に帰してくれるものと半信半疑ながら信じていたのに、十月一日朝、ブラゴエの駅よりアムール鉄道の貨車に乗せられた。

翌朝はクイブシェフからシベリア鉄道を東に進行していなければならないのに、十時になって、お昼過ぎても、依然太陽は後ろにあり、線路の加減で西向いているのでは、もうそろそろ東に向かうのでは、の願ひ空しく、列車は西へ西へと進行し続け、次第に帰心を断たれ、物言う元気もなくなり、あれほど帰国後の話に燃え盛っていたのに、車内は不安とあきらめで火の消えたように静寂になっていった。

列車は三日午後、とある駅に停車、全員おろされ、初